



事例 2 テクノロジー 開発

ビジョン達成のためには システム開発は不可欠

ベストリハ株式会社は、東京都内を中心にデイサービス事業、訪問看護事業等の介護・福祉事業を展開している。また、同社は、デイサービスの業務の効率化、付加価値を生む技術開発にも積極的に取り組んでいる。具体的には、通所介護計画書作成支援システム「はやまる」、デイサービスのDX化を支援するシステム「ヘルプケア」やそのデバイスの

ベストリハ株式会社

介護・医療・ヘルスケアの 社会問題を解決するには リアルなサービス＋テクノロジーが どうしても必要

システム開発やIoT機器の開発などを自前で行っている、ベストリハ株式会社。介護を提供する側が、なぜ「介護を支援する」サービスに力を入れているのだろうか

スマートバンド「ベストリハバンドPro」を自社開発し、ほかの事業者に販売している。

「ベストリハバンドPro」は腕時計のような形をしたデバイスで、装着した利用者の体温、血圧、脈拍のバイタルデータ、食事や睡眠、活動量など日常生活の情報を24時間365日集め、クラウドに送り管理するもの。集めたデータはシステムを通じて報告書や計画書に反映され、加算取得などにスムーズにつながる。このデバイス開

発の目的には、疾病を予防し「介護が必要ない世界を実現させる」という同社の構想がある。

理学療法士である同社の代表取締役の渡邊仁さんが東京都内で創業したのが2011年。デイサービスや訪問看護ステーション等の拠点を増やしている。そして、2020年9月にははやまるを、2021年8月にヘルプケアをリリースしている。しかしなぜ、同社はシステム開発事業に踏み込んだのだろうか……。この点について渡邊さんは、「不

由な世界を変える」というビジョンの達成のためです。多くの人がやりたいことを叶えられるようにするためには、リアルなサービスとテクノロジーで介護・医療・ヘルスケアの社会問題を解決する必要があるのです」と語る。

そもそも、基本報酬の大幅な上昇が今後は見込みにくいように、アウトカムを求められるなど、デイサービスの経営には課題が少なくない。加算取得などで収益の底上げをしていくなど努力が求められており、そ

ベストリハ株式会社
 ● 東京都台東区上野6-16-17
 朝日生命上野昭和通ビル6F
 TEL 03・6284・4350
 URL bestreha.com/
 2011年設立。デイサービスや訪問看護サービスなどのヘルスケアソリューション事業のほか、計画書作成サービス「はやまる」、制限食の「メデイミール」などを手掛けるPHRプラットフォーム事業がある。



「新しいことを始めるうえで、最初は苦労も伴う」と話す代表取締役の渡邊仁さん

のためには一人ひとりの利用者と向き合う時間の確保がより必要となる。人手を増やさずに、サービス提供する時間を増やすためには、バイタルデータの取得や計画書作成を自動化し、間接的な業務、事務作業の時間を削減するためのツールの活用が欠かせない。そこで、前述の各種システム等の開発・販売につながるわけだ。

さらに、同社独自で事業展開をす

るだけでなく、そこで得たノウハウをシステムに載せ、他の事業者にも利用してもらうことで、他の事業者の課題解決の一助にもなるし、「不自由な世界を変える」というビジョンを早く達成できるとい判断があった。

この判断をさらに進めるきっかけが、新型コロナウイルス感染症だ。同社でもコロナ禍の利用控えにより、ADLが著しく低下しているケースも出てきたことから、在宅時の利用者の状況・行動を把握し、アセスメントをしたうえで、在宅時にできるリハビリなどを提供する必要があるが出てきた。その際に、直接訪問してリハビリを提供するのではなく、テクノロジーを活用することでより便利かつ効果的にできるのではないかと、という発想につながっている。

テクノロジーを使い 新しい介護を生み出す

同社では、デイサービスの利用者の状態が改善して、要介護状態を卒業した後も、「ベストリハバンドPRO」などを利用した健康管理サービスを継続する仕組みを考えている。また、個人向けの糖尿病・腎

臓病制限食「メデイミール」、高齢者施設向けの「メデイミールPRO」といった真空冷凍パックの食事提供サービス事業を行うなど、ビジョン達成のために、介護保険事業にとどまらない展開を試みている。



「ベストリハバンドPRO」は、本体だけで直接クラウドにアクセスできる

なお、「ベストリハバンドPRO」は現在、デイサービス利用者全体の2割強の1000名が装着して社内運用を実施。活動量や睡眠のデータが明らかにすることで、利用者自身が歩行数や運動量、睡眠の質を意識するようになり、活動量が上がるとのプラスの効果も出始めている。一方で、睡眠時や在宅時には外してしまう利用者もいる。メリットを

説明して、いかに24時間つけ続けてもらえるようにするかが課題だという。

渡邊さん曰く「ビジョン達成に振り切った経営」をしている同社。テクノロジーを使って新しい介護サービスのかたちをつくり出そうとしている姿勢に共鳴して入社してくる社員も多い。「実際に新しいことを導入するのは想像以上に労力がいる。通常業務に加えて、新たに開発したシステムを取り入れ、実際に使用していかねばならないため、現場の負担は大きいと思います」。

どんなに良いものであっても、現場で使われなければ意味がない。そこで、同社では新しいシステムなどを導入する際は、渡邊さんが導入の意義などを説明する動画を配信。自分の言葉を通して、「介護が必要ない社会をつくる」ということにつながることを伝えているという。「今している仕事の延長線上に、医療や介護の必要のない未来がつながっているとしたら、最高じゃないですか」と渡邊さん。目の前の利用者の後ろにある未来に向けた事業を展開する同社の姿勢が、人々の注目を引き付けるのだろう。